



日時 令和2年2月13日(木) 13:30~15:00
会場 日本特殊陶業市民会館 フォレストホール

名古屋市9法人会合同講演会

激動する国際情勢と 今後の日本の対応

外交政策研究所代表 / 立命館大学客員教授
キャンングローバル戦略研究所研究主幹

宮家邦彦氏



地政学とは？

2005年に外務省を辞め、それからの15年、考えてきたこと、国際情勢をどうみているかをお話したいと思います。

地政学とは、国家の安全保障や利害関係を地理的状況や歴史的経緯から考える学問です。海洋戦略を論じたシーパワー理論、ユーラシアを一つの島とみるランドパワー理論がありますが、いまロシア・中国・イランがランドパワーを変えようとし

ています。

ロシアがクリミアやウクライナでやっていること、中国がアジアの海でやっていること、イランが中東でやっていること、この現状は不正義であるから、武力を使ってでも変えなければいけない、変えてもいいのだというのです。

我々の周り、中国と日本とアメリカを考えてください。アメリカと対峙する中国が日本を失ったらどうなるか。アメリカにとって日本を失うと中国はハワイまで出て、サンディエゴまでいきます。勢力的縦深が浅く防衛が難しいのです。それが最大の問題です。

昔はソ連が強かったからアメリカは中国と手を結んだ。でも今は中国が強くなってきました。

ヨーロッパはロシアがあれば、ポーランド、ドイツ、フランス、スペインがあって中国は簡単には出られない。中東はイランがいるけれどイラク、サウジアラビア、エジプト、モロッコもある。いずれも勢力的縦深が深いです。

日本に

インテリジェンスサービスはない

インテリジェンスサービスとは何か？

鵜飼みたいなものです。鵜を操って魚を吐き出させる。それが情報、インフォメーションです。鵜が吐き出した魚を板前さんが料理して食べられるようにする。CIAでもMI6でも、情報分析官がナマの情報を分析して大統領や首相に提供するのです。作業員と分析官と両方いて初めて情報機関になります。つまり日本には(軍事)情報機関はありません。

外交官として外国に行ったら、その国の法律を尊重します。でもスパイは法律を破って情報をとりますから、日本の外交官はスパイになれないのです。

1930年代と

2020年の類似点

2018年から時代が変わり始めました。

私の歴史観は「歴史は繰り返さないが、似たことが起きる」です。





私は、いま各国の政治家たちは「勢いと偶然と判断ミス」を繰り返すようになったのではないか。それは1930年代に似ていると思ひ心配しています。

1929年NY大暴落、そして金解禁で大騒ぎになりました。満州事変があって、リットン報告書があって日本は国際連盟を脱退しました。ヒトラーやチェンバレンが出てきて第二次世界大戦になりました。

1945年第二次世界大戦が終わって、これからは国際主義だと国連、世界銀行、IMF、WTOをつかって頑張ってきた。それは冷戦期でもありました。修正資本主義にして富も再分配をして社会を安定化させ成功しました。

ところが90年代ソ連が崩壊した後、これからはグローバリゼーション、効率だと言い始めたら弱肉強食、わずかの勝ち組と無数の負け組のともない資本主義に戻ってしまったのです。

アメリカのトランプ氏が選ばれたのは、白人カラー低学歴の負け組がアメリカで増えて、「グローバリゼーションがなん

だ、アメリカ第一だ」の動きになったからです。イギリス第一のブレグジット、ヨーロッパのネオナチとか反移民とか、すべて自己中心の1930年代と同じです。

いまアメリカで、一番の高収入なのはアジア系の人たちです。そして2050年には白人が少数派になります。この恐怖がトランプ現象、つまり負け組の逆襲になったのです。

力の真空

中国の二千百年の歴史をみてみます。5世紀の南北朝時代までは中国の脅威は北からでした。だから万里の長城が造られました。それから漢民族は盛衰を繰り返して現代に至りますが、漢民族の領土は蛮族との力関係で決まってきました。現代の中国の蛮族はおそらくベトナムぐらいですので、陸上国境は安定しています。いまの中国の脅威は海からです。もっとも豊かで脆弱な地域は太平洋岸(天津から香港まで)。だからシー

レーンが必要なのです。

第一列島線の内側、将来的には小笠原からグアムに向けての第二列島線の内側は、中国は自国の海域だと主張します。

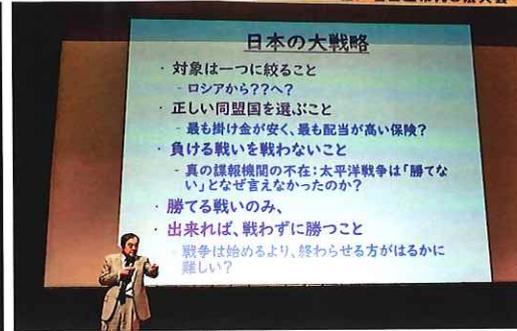
それに立ちはだかるのが日米安保条約です。

中国は岩を積み立て軍事要塞にしましたが、国際法上、岩をどんなに埋め立てても島にはならず、また岩は領海も領空もないはずなのに、日本としてはこのシーレーンで自由に航行できないのは困ります。

フィリピンにはアメリカの空軍・海軍の巨大な基地があり、米兵が駐留していました。1991年11月フィリピンはアメリカに基地を提供する協定を更新しなかったため、米軍は撤退しました。数カ月後に領海法を作って、これは俺たちのものだと言ったのは中国です。

「力が真空」になると、周りの勢力が、その真空を埋めにきます。日本が尖閣諸島を失いたくなければ東シナ海に力の真空をつくってはいけないと思います。





米中の関係は大国間の覇権争いです。アメリカの外交関係の専門家たちは、西太平洋に対するアメリカの覇権に対して、中国に代替されるかも知れないという恐怖をもつようになったのです。この恐怖は1930年代にアメリカが日本に対して感じた恐怖に近いと思います。日本はアメリカの西太平洋における覇権にチャレンジしてやられました。

生きるか死ぬか。私は「米中コールドスターウォーズ」と言っています。中国は賢いですからアメリカにケンカを売る気はありません。日本のように真珠湾攻撃はしません。アメリカも賢いです。お互いに抑止は効いています。コールドです。映画『スターウォーズ』のエピソードのように、米中の覇権争いは最低15年続くでしょう。

中国の一人当たりGDPは8,000ドルくらいです。1万ドルを越えると途上国はひとつの壁にぶちあたるのです。中国はGDPを上げるために内需を拡

大しイノベーションをやり、国有企業を改革し規制緩和をする。いまそこにさしかかっています。

日本は海洋国家で貿易立国です。海の動きに敏感でなければいけません。アメリカ海軍は空母を11隻もっていて、ヘリ空母を含む20隻ほどが世界中をローテーションで回っています。

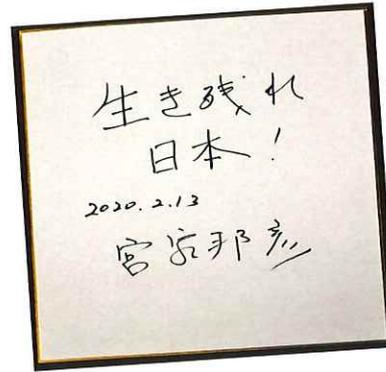
2011年4月、3月の東日本大震災後に米軍はともだち作戦で、日本の周辺に空母機動部隊が2つ、海兵隊の部隊が1ついて東北の同胞を支援してくれましたが、もし朝鮮半島でなんらかの危機があって、同時期に中東や南シナ海で緊張があったとき、米軍の虎の子の部隊をどこにさし向けるか。日本の自衛隊は中東では戦えません。では南シナ海で何かあったらどうするのか、中東地域でも何か起こるかわからない状況です。「力の真空」に備えて考える必要があると思います。

これからの日本の外交ポイント

- ① 対象はひとつに絞る。
マーケットも同じです。
- ② 脅威認識を確定し、その脅威にもっとも正しい同盟国を選ぶこと。それが日米安保条約です。コストパフォーマンスを考えて、安い掛け金で大きな利益を得られる同盟国を選ぶこと。
- ③ 負ける戦争を戦わない。
- ④ 孫子の兵法です。勝てる戦いのみ、出来れば戦わずに勝つ。勝てる戦争だけ戦う態勢にしていれば戦争は防げます。万が一戦わざる得ないときは、抑止をして勝つ。国家安全保障政策については最低限のコンセンサスをつくって、政権が変わっても大きな変化がないようにする。

この4つの大原則を守っていれば、日本は100年生き延びられると思います。





質疑応答

Q：米中戦争の
落としどころは。

A：我慢比べ、諦めたほうが負けです。近年アメリカの力が落ちてきていると言われますが、アメリカの力は落ちていません。世界一厳しい競争をしてきて、優秀な移民をどんどん受け入れて、自由にやらせているからです。国力は落ちていませんが、国力をしっかり使う政治家の力が落ちてきています。劣化したアメリカの政治指導者と、独裁制でなんとか力を保っている中国との我慢比べです。中国の体制が変わるには20年ほどかかると思います。

Q：中国一党支配は続くのか。

A：私は続くと思います。独裁国家は政敵を何の制約もなく殺せます。重要なのは、我々は90年代に大失敗をしました。1989年天安門事件が起こりました。それで我々は中国に経済制裁をしましたが、いち早く解除しました。中国を資本主義化して、市民社会ができ内側から変わって民主国家になると勘違いをしたのです。世界は中国に膨大な投資をしました。結果、豊かになった中国は、増えた

富を国防と国内治安に使い、我々の望む社会体制にはなりませんでした。中国はソ連が崩壊したのを見て自由化してはいけないと決めたのです。

Q：アメリカの大統領選挙の
予想は。

A：アメリカは各州に、それぞれ独自の民主党と共和党があり、50の民主党と共和党がマジンガーZ合体ロボのように4年に一度50の部品が合体して動きます。共和党は合体していますが民主党が合体できるのか。一致団結してトランプ氏と戦えるのか。今はトランプ氏が強いと思います。

ただし過去30～40年、民主党が勝つときは若いニュースターが突然現れたときです。カーター氏、クリントン氏、オバマ氏です。それに匹敵する人があれば勝てますが、いまはいません。

Q：日本の自民党と野党の姿は。

A：本当は健全な政権交代が何年かに一度、起きて権力が腐敗しないように、常に新しい血を入れるようにするのがあるべき姿だと思います。



演題「激動する国際情勢と今後の日本の対応」
講師 外交政策研究所代表／立命館大学客員教授
キャンングローバル戦略研究所研究主幹 宮家邦彦氏

※ この記事は令和2年2月13日(木)
の講演を要約したものです。
文責／公益社団法人 名古屋西法人会